

随筆

タイ駐在記

河 部 俊 晴

1. はじめに

私は、2020年11月から2024年12月にかけての約4年間、タイのKYB Asian Pacific（以下KAP）に赴任し、ショックアブソーバ（以下SA）の設計業務に従事した。駐在期間を振り返ってみると、初めての海外生活、新型コロナウイルスの猛威、非常事態宣言による活動制限、コロナ終焉からの復興といった様々な事が起こった時期であったが、貴重な経験を積むことができたので、ここにその一部を紹介する。

2. タイ赴任

2.1 赴任準備

当初は2020年4月に赴任する計画で準備を進めていた。2月には事前準備の為にタイへ渡航し、東南アジア特有の雰囲気を感じとり、これから公私共にお世話になる駐在員の方々や仕事を共にする現地スタッフへの挨拶、入居するアパートの下見から仮契約まで結び、赴任に向けて準備は順調に進んでいた。

しかし、突如現れて猛威を振るった新型コロナウイルスによって、全ての赴任計画が中断となった。準備出張の時点で、日本国内でも感染者が出て連日報道されている状況ではあったが、対岸の火事、すぐに収束するものだと思っていた。しかし、そんなに甘くはなかった。3月以降はご存じの通り、世界中で感染が拡大し、海外渡航が制限・禁止され、取得していた入国ビザも効力を失った。当時はコロナ感染による暗いニュースばかりが流れ、渡航制限が解除される兆しはなく、先行きが見えない状況に陥っていたのを覚えている。

そこから半年ほどが経ち、ようやく落ち着きを取り戻したところでタイへ渡航できる目途が立った。当時の渡航条件は今では考えられないほど厳しく、多くの申請書類を準備する必要があった。特に、「渡航フライト72時間前のPCR検査で陰性であること」が最後の難関で、そこで陽性になると全ての準備が台無しになるリスクがある為、体調管理には細心の

注意を払って日常生活を過ごした。幸いにもコロナに罹患することなく、タイへ入国する準備が整った。

2.2 タイ入国

ようやくタイ渡航の日を迎えたが、到着してからも試練が待っていた。渡航禁止は解除されたが、厳格な制限は続いており、全ての申請書類の審査やPCR検査を行う必要がある。空港に到着した頃には長蛇の列が出来上がっていた（写真1）。

空港スタッフは皆、防護服を身にまとい、入国者は、さもコロナ患者のような扱いを受け、適切な距離を空けて等間隔に並べられた椅子に座らされた。書類チェックとPCR検査を受け、結果は全て問題無し、無事タイへの入国が認められた。



写真1 渡航制限下の入国審査

しかし、そこからも自由に行動することは許されなかった。次にホテルへ移動となるが、当時はASQと呼ばれるタイ政府指定の宿泊施設で2週間の隔離が必要であった。イミグレを通り抜けてからも、監視体制の中、防護服のスタッフに誘導されて、大きなバンの後部座席にさせられた（写真2）。

たとえ同じ行先の人がいようと相乗りではなく、1人1台のチャーター便。贅沢な移動ではあるが、そんな優越感が一切感じられないのは、運転席と後部座席の間に無機質で透明なビニールが隙間無く貼られているからだだろうか、不安とスリルを感じながら隔離ホテルへと運ばれていく。



写真2 隔離施設への移動



写真3 隔離生活の戦利品、タイ駐在の開始

2.3 隔離生活

空港から車に揺られて約1時間、バンコク市内のホテルに到着したが、正面ロビーではなく裏口で降ろされる。微笑みの国と呼ばれるタイの歓迎ムードはそこには全く無かった。今思うと、コロナ感染者が出る度に、SNS上で風評被害が巻き起こっていた為、人目を避けるように海外からの渡航者を受け入れていたのかもしれない。そこでも、さきほど空港で受けたばかりのPCR検査が待っていたが、勿論、結果は陰性。部屋へ案内され、長かった緊張状態からようやく解放された。

2週間の隔離生活は過酷なものだった。最初の1週間は部屋から一切出ることは許されず、重たい入口ドアが開くのは、防護服スタッフによる定期回診と廊下の小さなテーブルに置かれる食事を受け取る時のみであった。そんな引きこもり生活に耐えながら1週間が経過すると、再びPCR検査が待っていたが、これをクリアすると、1日1時間だけ屋上に出る権利が与えられた。太陽の日差しを浴び、外の空気を吸えることがどんなに素晴らしいことか、しみじみと実感したのを覚えている。

隔離生活の後半では早速、東南アジアの洗礼を受けた。ひどい食あたりを起こし、下痢と嘔吐を繰り返して発熱の症状も出ていた。コロナの疑いがあると、別の隔離施設へ移動させられる可能性がある為、日本から持参した薬を飲み、ひたすら寝て回復を祈った。翌日の回診の体温検査では熱が出ていたが、防護服スタッフには、つい先程まで寝ていたから体が火照っていたこと、コロナの症状は全く出ていないことを笑顔で説明したら、不思議そうな顔をして去っていった。拙い英語が通じなかったのかもしれないが、最大の危機を乗り越えた。そしてまもなく体調も回復し、最終日のPCR検査も無事クリアして、過酷な隔離生活を終えた(写真3)。

3. タイ駐在

隔離生活を無事に終えて、タイでの生活が始まった。当時はタイ国内の感染者数が落ち着いていたこともあり、入国者に対する厳しい規制とは対照的に、街中での活動規制は解除されており、不自由なくタイの生活を始めることができた。

3.1 業務

タイでの業務は主にSA設計として、アセアン拠点の開発支援、現調化による原価低減活動、量産不具合の対策支援に従事した。初めての海外赴任ということもあり、最初はコミュニケーションで苦労したが、タイ人スタッフも日本人の取り扱いに慣れていて、お互いに第2言語の拙い英語ではあったが、次第にコミュニケーションが取れるようになった。

また、タイだけでなく、マレーシア・インドネシア・台湾の拠点とも連携して業務を進めていく必要があり、同じアセアン地域とはいえ、国が違えば言葉も文化も違うメンバーと意思統一を図りながら業務を進めていくのは大変な苦労があったが、とても良い経験を積むことができたと思う(写真4、5)。

また、アセアン拠点の開発業務においては、「自立化」という言葉を常に意識していた。これまでは、お客様である自動車メーカーも含め、日本主導で開発を進め、現地で生産を立ち上げる為に業務を移管するケースがほとんどであった。しかし、開発初期段階から現地へ業務移管し、日本主導から現地主導の開発へと変わろうとしていた。お客様のカウンターパートとして期待に応えるべく、仕事のやり方を変えていく必要があった。いきなり日本の支援なしにやるのは難しいだろうと思っていたが、KAPスタッフの仕事に対する意欲や技術レベルは高く、現地主導・自立化についてもすぐに理解を得ることが出来た。勿論、日本やアセアン各拠点からのサポートを得ながらではあるが、KAPスタッフの頑張りもあり、最大の成果を出せたと思っている。

性能向上アイテム提案から採用までの開発プロセスを現地主導で完遂させることができたし、競合他社が現行商権を持っている重要機種のソーシング活動において、KYB (Thailand) Co., Ltd. (以下KYBT) と一丸となり工場側・設計側の目線で原価低減活動を推進し、悲願の受注に繋げることができた。まだ途中段階ではあるが、今後に向けて「自立化」の活動を推し進められたと思っている。

日本の関係者を含め、各拠点の駐在員や現地スタッフの方々には、たくさんご迷惑をお掛けしたこと、強大なサポートを頂いたこと、この場を借りて、お詫びと感謝を申し上げる。



写真4 KAPスタッフ

タイ料理と比べれば多少値は張るが、食生活で困ることはなかった。

また、キャッシュレス化が思っていた以上に発展していることに驚いた。日本と比べても、タイの方が普及率が高いのではないと思う。QRコードを読み取って決済する方法が主流で、どんなお店でも使える。ローカルの市場や屋台でもQRコードが店頭に貼られている(写真6)。銀行アプリを使えば口座から即座に引き落とされるシステムで、手数料なし・クレジットカード登録も不要の為、在留外国人でもすぐに利用可能だ。どこへ行くにしても多くの現金を持ち歩く必要はなかった。



写真6 クロントゥーイ市場



写真5 アセアン拠点3社(KAP/KYBT/※KMSB)での工程改善活動 ※KYB Malaysia Sdn. Bhd

3.2 生活環境

タイは言わずとも知れた親日国であり、2020年当時で在留邦人の数は約8万人、駐在員が住むバンコクだけでも約5万人が生活している。バンコクの街中を歩くと、日本人を見かけない事はほぼ無いと言ってもいい。これだけ多くの日本人がいれば、日系スーパーで日本の食材を簡単に手に入れられるし、日本食レストランも数えきれないほどある。海外でよくある「なんちゃって」日本食ではなく、日本となら遜色ないレベルのものを食べることができる。

居住地はバンコクでも在留邦人が多く住んでいるエリアで、日本語通訳が常駐する総合病院や日系スーパー、飲食店が密集している。ひどい交通渋滞と大雨による浸水を除けば、利便性はとても良い。

また、タイは年中暑い為、日当たりの悪い北向きの部屋が好まれる。最初に住んだアパートは南西向きであった為、仕事から家に帰ってくると、もの凄く暑かったのを覚えている。アパートは1年契約の為、更新のタイミングで引っ越しが可能だ。部屋の向きだけでなく、近隣施設の騒音や水周りのトラブルなど、住んでみないと分からないことも多く、気分転換にもなるので引っ越しする駐在員は多い。

2年目に引っ越したアパートは日当たりもほどほどで暑くなく、BTSと呼ばれる高架鉄道の駅が近く、利便性がとても良かった(写真7)。渋滞を避けて移動が出来るので、休日の移動手段として重宝していた。結局それ以降は引っ越しすることもなく、日本へ帰任するまで同じアパートに住み続けた。

3.3 交通事情

バンコク都心部は高架鉄道(BTS)や地下鉄(MRT)等の交通網が発達しているが、そのエリアを除けばどこに行くにしても車が必要である。そ



写真7 バンコクの高架鉄道 (BTS)

して朝・夕の通勤時間帯の交通渋滞はひどく、特に雨季の渋滞はかなり堪える。バンコクから事務所のあるチョンブリまでの通勤は、通常で片道1～1.5時間程度であるが、雨季には帰宅するまでに3時間以上かかったこともある。

タイには日本のような四季がなく常夏であるが、乾季（11月～2月）・暑季（3月～5月）・雨季（6月～10月）に分かれており、1年の半分弱は雨季である。雨季になると、全国各地で洪水が起こるが、原因の一つとして、地形的な問題がある。バンコクは世界でも海拔の低い都市の一つで、海拔は1.5mほど。陸部にかけても標高差が僅かしかない為、河川の流れがとても遅い。そこに大量の雨が降ると、海への放流が間に合わず、各地で水が溢れてしまう。排水システムの改善を進めていると聞かすが、タイにいた4年間の状況を見ると、まだまだ追いついていない。今後、地球温暖化による海面上昇でバンコクはどうになってしまうのか、とても心配だ。

KAPの駐在員は車の運転が認められていない為、仕事のある日は運転手にサポートしてもらっているが、休日はタクシーを使う機会も多い。料金は日本と比べると異常なくらいに安く、初乗りは35バーツ（約160円）。距離と時間で値段が上がっていくが、1時間ほど乗っていても1,000円程度で済む。

但し、ぼったくりや詐欺が横行しており、細心の注意が必要である。外国人や観光客に対しては、メータを使わず言い値を吹っ掛けてきたり、目的地に着いてから高額請求されることもあるそうだ。一部ではあるが、素行の悪いドライバーもいて、ダッシュボードに銃器を隠し持っているという話もあるので、トラブルがあるととても危険だ。

最近は配車アプリ（GRAB等）が普及し、事前に目的地を設定して料金を確認できる為、そういったトラブルは避けられる。勿論、悪いドライバーばかりではないし、タイは陽気な人が多い。日本人と分

かると、片言の日本語で話しかけてきたり、日本の音楽を流してくれたりすることもあった。注意して利用すれば、とても利便性の高い移動手段である。

路線バスは更に安く、エアコン有無や距離によって変わるが、8～25バーツ（約36～120円）程度で利用できる為、地元民の大事な足となっている。バンコク市内には数えきれないほどの路線が張り巡らされ、電車ではいけないところもカバーされているが、交通渋滞によって常に運行ダイヤが乱れている為、時間通りにバスが来ることはほぼ無い。また、目的地を乗務員に伝えて運賃を先払いしなければならない為、利用にあたっての難易度は高い。何事も経験と思い、タイに慣れてきた駐在3年目にチャレンジしてみたが、時間に余裕がある時や目的地によっては、利便性は高い。時々利用していたが、日本人をほとんど見掛けたことはなく、ローカルの雰囲気味わえる移動手段である。

3.4 タイ料理

仕事や日常生活に慣れてきた頃には、せっかく異国の地に暮らしているのだからと、タイ料理に積極的にチャレンジした。タイ料理は一言でいうと、味が濃いものが多い。特に辛さに関しては、日本人の感覚とはかけ離れていて、辛いものが好きだとしても、決してタイでは好きと言わない方がいい。注文する際に辛さを聞かれるが、「普通」や「少し辛め」で頼むと大抵は後悔する。タイ人の普通と日本人の普通は全く違うのだ。しかし、辛さを間違えなければ、日本人の口に合うタイ料理はたくさんある。

定番ではあるが、おすすめはタイの国民食であるガパオライスだ（写真8）。ホーリーバジル（ガパオ）で炒めた具材をごはんにかけるシンプルな料理であるが、とても奥が深い。具材は豚ひき肉が最もポピュラーであるが、豚バラ肉を揚げたものや、豚肉以外にも鶏肉、牛肉、海老やイカなどの魚介類も選べる為、飽きることはない。近所のレストランだけでなく、タイ人しか訪れないようなローカル屋台やフードデリバリーを駆使して、食べ比べてはお気に入りの店をよく探していた。

海老料理もおすすめだ。バンコク郊外のナコンパトム県では海老の火山焼きが有名で、海老のサイズ（大・小）を選んで、キロ単位でオーダーする。火山に見立てた蓋にアルコールを垂らし、火をつけるファイヤーパフォーマンスもあり、見た目にも楽しめる（写真9）。バンコクからは少し距離があるが、これを目当てに休日のゴルフをわざわざ近くでセッティングし、駐在員や仕入先の方を誘って定期的に訪れていた。



写真8 ガパオライス



写真10 マンゴーの名店、メーワリー



写真9 海老の火山焼き

また、辛い物だけでなく、甘い物もタイ人に好まれている。辛さと同様、程よい甘さを求めるのであれば注意が必要だ。タイティーと呼ばれるタイの紅茶も、普通にオーダーすると砂糖がたっぷり入っているし、コンビニやスーパーで売られているコーヒーも無糖を探す方が難しい。信じられないかもしれないが、ペットボトルの日本茶ですら砂糖入りが基本となっている。ラベルの表示は分かりづらいが、キャップの色で砂糖の有無を見分けられることができる。それでも間違えて買ってしまい、何度か後悔したことがある。

料理ではないが、タイの果物は安くとてもおいしい。特にマンゴーがおすすめで、1個50～100バーツ（230～450円）程度で、日本の高級青果店に引けを取らないものが手軽に味わえる。そのまま食べてもいいが、「カオニャオマムアン」と呼ばれる、もち米と一緒にココナツミルクをかける食べ方がタイではポピュラーだ。また、生の果物は日本へ持ち帰ることは出来ない為、アパートの近くにあるメーワリーという有名なマンゴー店のドライマンゴーをお土産としてよく買って帰っていたが、非常に喜ばれた（写真10）。またタイに行く機会があれば、絶対に立ち寄りたいと思う。

3.5 非常事態宣言による活動制限

赴任してすぐは落ち着いていたものの、2021年に入ってから新たなコロナの変異株が見つかり、タイでも感染者が確認された。瞬く間にタイ全土に拡がり、日に日に感染者数が増えていった。それを受けてタイ政府は少しずつ規制を強め、深夜の外出禁止や時短営業などの活動制限を発令し、生活の自由が奪われていった。当時は、世界各地で同じような状況に陥り、食料品やマスクなどの日用品の買い占めが横行していたと聞かすが、タイはそこまで深刻な事態には至らず、生活必需品が手に入らないということは無かったと思う。

その後もなかなか収束しない状況に対し、ついにタイ政府は非常事態宣言を発令、最も厳しい活動制限下に置かれた。夜9時以降は外出禁止、ショッピングモールやゴルフ場等の娯楽施設は終日閉鎖、飲食店は時短営業で店内飲食禁止となり、病院・スーパー・薬局・コンビニ以外は閉まっている状況がしばらく続いた。

平日は家と職場を往復する以外にやることはなく、ずっと閉じこもっていた。仕事も打ち合わせはWeb会議で行い、面着で行われることは無くなった。在宅勤務を導入する企業が増えていく中、海外で生活しながら仕事を続けるモチベーションを維持するのが難しい時期も正直あった。

活動制限の中でも、レストランの店内飲食禁止は、単身赴任の身としては特に影響を受けた。タイは外食費がそこまで高くないので自炊は一切しておらず、普段は仕事帰りにどこかに立ち寄って食事を済ませていたのだが、規制によってそれが出来なくなってしまった。しかし、テイクアウトやデリバリーが急速に発達していったことで、問題なくやり過ごすことができた。慣れてしまえば、アプリを駆使して普段は行かないような店や名前も知らない料理にチャ

レンジするなど、窮屈な生活の中でも新たな発見と楽しみを探しながら過ごしていた。

休日もやることが無かったが、家に引きこもっていても仕方がないので、日中は歩いて街を散策することにした。人が集まりそうなところはなるべく避けようと思ったが、そんな心配は全くいらなかった。

普段は人でごった返すようなショッピングモールや観光名所の大きな寺院も閉鎖していて、どこに行っても閑散としていた。しかし、目的地に辿り着くまでの道中、普段は車か電車で移動しているところを歩いてみると新たな発見もあり、意外と楽しむことが出来た。有名な観光名所だけでなく、ローカルエリアの市場や住宅街を通るとタイ人の生活を感じることが出来たし、記念碑や銅像を見かけた際にはその地の歴史的背景を調べたりすることで、タイのことを深く知るきっかけとなった（写真11）。



写真11 エラワン博物館の巨大象

3.6 コロナ終焉からの復興

非常事態宣言が発令されてからは、繰り返される活動制限と緩和に一喜一憂しながら過ごしていたが、2022年の後半に入り、ようやく終わりが訪れた。海外からの入国規制は撤廃され、コロナ以前のように自由に行き来が可能となり、観光大国であるタイには多くの外国人観光客が戻ってきた。バンコクにも、中国やインドからの観光客らしき人達が押し掛けるようになり、今までにない活気に溢れていた。

活動規制が無くなってからは、タイ国内各地の観

光地を訪れた。タイは仏教の国で至る所に寺院があり、中でも印象に残っているのが、タイ三大寺院の一つ、バンコクにあるワットポーの涅槃像だ。お釈迦様（ブッダ）が悟りを開いて臨終する前の寝姿を表しており、高さ15m、全長46mで全身が金箔に覆われており、壮大なスケールの仏像だ（写真12）。その足裏にはタイ仏教の世界観を表す108個の絵が螺鈿細工（貝殻を研磨して模様にはめ込んでいく装飾方法）と言われる技法で描かれており、とても迫力があつた（写真13）。ちなみに、昔に見覚えのある某テレビゲームで出てくる涅槃像のモデルは、バンコクから少し離れた旧王朝のアユタヤに実在している。実際に訪れてみたところ、バンコクの涅槃像には及ばなかったが、あの世界観を感じることが出来た。



写真12 ワットポーの涅槃像



写真13 足裏の螺鈿細工

また、タイの旧正月を祝う行事であるソンクランの水かけ祭りにも参加した。毎年4月中旬の最も暑い時期に開催され、タイ全土で水を掛け合って新年を祝う独特の祭典として広く知られている。バンコクには世界中から旅行客が押し寄せ、メイン通りは昼夜を問わず水かけ会場と化し、水鉄砲やバケツを手互いに水を掛け合う盛大なイベントとなっている。

コロナによって開催できない時期が長く続いていたこともあり、新年を祝うだけでなく、コロナ終焉

と復興を願うように、タイの人々が満面の笑顔で盛り上がっていたのが印象に残っている。駐在最後の年に参加したソンクランでは、(衛生的にも良くない)水を多く浴びたことで、数日間体調を崩してしまったことも、今では良い思い出となっている。

4. おわりに

4年間のタイ駐在を改めて振り返ってみると、あっという間であったが、問題なくやり遂げるこ

ができたのは、多くの方々からサポートを頂いたおかげである。駐在中にお世話になったアセアン各拠点の駐在員およびローカルスタッフの皆様、日本の関係者の皆様、そして家族には、この場を借りて感謝とお礼を申し上げる。コロナ禍の海外駐在ということもあり、いろいろな苦労もあったが、経験したことを今後に活かし、会社に貢献していきたいと思う。このような機会を頂き、謝意を表したい。

著 者



河部 俊晴

2008年入社。AC事業本部 SA事業部 技術部所属。トヨタ自動車出向、KAP駐在を経て現職。自動車用ショックアブソーバの設計に従事。